



TITLE:

『王勃集』と王勃文学研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

道坂, 昭廣

CITATION:

道坂, 昭廣. 『王勃集』と王勃文学研究. 京都大学, 2017, 博士(文学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.r13075>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開

京都大学	博士（文学）	氏名	道坂 昭廣
論文題目	『王勃集』と王勃文学研究		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>本論文は、初唐の文学者王勃と日本に伝わる彼の文集についての考察からなる。</p> <p>第Ⅰ部「王勃の文学とその周辺」は、王勃を中心とする初唐文学の特色について論じる。王勃等いわゆる初唐の四傑は、六朝時代から続く技巧的遊戯的文学を変革し、文学評価の基準を相対化することによって革新をなしとげ、盛唐文学への道を切り開いたとされる。彼らはなぜそのような文学観を持つことが出来たのだろうか。彼らが初唐という時期に登場した理由を、その出現の背景、彼らに対する同時代の支持という点から解明しようとしたのがこの第Ⅰ部である。まず「王勃試論」は、王勃ら初唐の四傑が北朝支配地域の漢族ということに革新性の理由の一つを求める。王勃・盧照鄰、そして恐らく楊炯も、ある程度の規模の田地を保有しつつ、その維持の為にも官僚として出仕する必要があった漢人の家系であった。王勃の家は太原王氏に属するが、その中心的な存在ではなく、祖父王通は、在野の儒学者として終わった。しかしそれは王通の弟王績と同じく、官僚としての政治参加を諦めて選んだ生き方であり、一族は自らの家の誇りの源泉として王通の学問を顕彰しようとした。王勃が懐いた不遇感は、個人のものであるとともに、彼の家系が社会に対して懐いてきた不遇感を継承したものだとは本章は説く。</p> <p>つづく「王勃の序」は、王勃が生涯にわたって作り続けたジャンルが「序」であり、その生涯を強く反映することを述べ、「初唐の「序」」は、初唐から王勃等によって「序」が盛んに作られるようになった理由を論じる。唐は詩の時代であり、詩の主要な題材は、友人との出会いや別れの高揚した精神や悲しみ、即ち友情が重要であった。しかし官僚として故郷を離れ中国各地を転々とする苦しみ、その過程での出会いと別れは、唐代初期においては、詩よりもまず序というジャンルで先鋭に詠われたのではないかと主張する。もちろん盛唐詩と同じく、送別の高揚した精神を詠う詩が初唐に無いわけではない。しかし送別をはじめとする初唐の宴席の場で詠われた詩は、少なくとも序の記録を見る限り、六朝時代の宴席の文学的作法を引き継いだ遊戯的技巧的なものであった。作品創作の場としての宴席を考えた場合、そこでは六朝と同じく、その場で韻やテーマを与えられる賦韻・探韻のような遊戯的且つ作者の機知を問う作詩が行われていたのである。王勃が序というジャンルの作品を作ったのは、そのような作詩が行われていた場であった。六朝と同じような場で、同じような作詩が行われていたのに、六朝では行われていなかった序が作られるようになったのは、その場に参加する階層が六朝と唐では異なるからである。王勃等が参加した宴席は、</p>			

官僚が任地に赴く途上や任地で、また赴選の旅など、不遇感を胸に各地をさすらう人々が出会い、別れる場であった。六朝の貴顕の宴のように、同じ人々によって日常的に開かれる場ではなく、それは一回限りの文学の場であった。当然そこに流れる感情は六朝の宴席とは異なる。彼らがそこで六朝以来の賦韻・探韻を行っていたということは、彼らはまだ自分たちの表現を発見できないでいたことを示す。しかしそのような遊戯的な詩では盛ることのできない表現を求めて発見されたのが序であったのだ。唐代文学の基調となる友情は、遊戯的な詩と同時に作られた序によってまず表現されたのである。序の初唐における爆発的な流行は、このような状況を示していたのである。王勃等の序に表現される感情は、個人のものであるとともに、序が作られた宴席に連なった人々の感情でもあった。王勃等は、このような自分たちの表現を持つことができなかった初唐の新興知識人たちの代弁者であったのである。王勃等によって作られるようになった序は、初唐以降一つの文学ジャンルとして確立する。序は文学の担い手となる知識人が最初に獲得した表現であったのである。序の主要な作者であった王勃は、このような意味で初唐という時期を象徴する文学者であったと言えるのである。王勃等の文学に共感したのは、自負を胸に下位に呻吟する人々であった。このような彼らの感情が序というジャンルを勃興させたとするなら、同じ感情から彼らに発見されたのが陶淵明である。

「王勃・楊炯の陶淵明像」は、彼らの描く陶淵明像を陶淵明評価史の一つのエポックとして注目する。彼らのイメージする陶淵明は、六朝時代の社会に背を向けて田園で暮らす隠者の姿ではなく、地方の県令のようなさほど高くない地位にあっても、そのような世俗的価値と異なる価値観をもち、社会の中で暮らした人物であった。そこには、官位のような社会の評価とは別の私的な精神の充実に意義を認めようとする中下級官僚の新しい価値観が込められているのである。「盧照鄰の陶淵明像」は、彼の描く陶淵明が初唐の陶淵明像の原型であるとし、彼にそれを可能にさせたのが、下級官僚である一方で田園の暮らしも知るという北朝の在地豪族の家の雰囲気であったのではないかと指摘する。公的地位を唯一絶対の価値としない態度が、北朝の中小規模の田地を維持する家にはあり、そのような感覚が北朝地域の出身でありながら、南朝の陶淵明の日常生活を詠う作品に親近を感じさせ、陶淵明文学を発見させた可能性があることが述べられる。官に象徴される社会に参加せざるをえないが、その価値観に全面的に依拠できないという北朝地域のさほど大きくはない豪族漢人としての違和感、そして私的な生活の場を持つことによって、社会を客観的に見ることが出来たことが彼らの文学の革新の源にはあるのではないかとする。

第Ⅰ部では、文学の担い手となる新興知識人層の感情と意識に表現を与えたのが王勃等であり、それはジャンルとしては序に、人物像としては陶淵明に象徴されていると主張する。王勃の作品は中国で流行したと推測される。その根拠は、正倉院所蔵

『王勃詩序』の他、『王勃集』巻二十八（上野本）、同巻二十九・三十（東京国立博物館本）と、『王勃集』編纂直後に書写されたとも言えるテキストが日本に伝わっていたからである。

第Ⅱ部「日本伝存『王勃集』の意義」は、日本に伝存する『王勃集』の鈔本の性質を明らかにしようとする。「テキストとしての正倉院蔵『王勃集詩序』」は、中国に伝わる王勃作品との校勘に基づき、中国諸本と異なる正倉院本の文字の多くが、そのように作る根拠を指摘できること、正倉院本が王勃の初期の作品集の一つを正確に写したものであることを明らかにした。

「王勃佚文中の女性を描く二篇の墓誌」は、上野本の墓誌から二篇を選び、それらは王勃が依頼者の意図するところを整った駢文で表現したものであり、歴史的資料としてばかりではなく、駢文作者たる王勃の文学作品として評価されるべきであることを述べた。中国伝存本との異同において、正倉院本の文字の多くが、そのように作る根拠を求めることが可能であることは先に紹介した。一方で中国諸本の序は平仄の整齊性が意図され、また同一典拠を用いていても語句を異にするなど、筆写を重ねるうちに筆写者によって書き換えられた可能性があることが明らかになった。もちろんそれは『王勃集』だけではなく、筆写時期のテキストには一般に行われていたことであり、いわばテキストの読まれてきた歴史として一概に否定すべきではない。但し王勃の代表作とされる「滕王閣序」については、他と異なる原因で書き換えられたと思われる文字が見られる。

「正倉院蔵『王勃詩序』中の「秋日登洪府滕王閣餞別序」について」は、「滕王閣序」の文字の異同に問題を絞り、中国諸本には、所謂王勃滕王閣故事や欧陽修の批判的論評によって固定してしまった文字があることを明らかにした。そしてこのことが「滕王閣序」の解釈に混乱と誤りを生じさせることになったことを論じた。本章では具体的に以下の三点を指摘する。第一は「滕王閣序」中の名句とされる「落霞与孤鶩齐飛」である。この句についてこれまで多くの論争があるが、論点の一つは「孤鶩」の語の解釈であった。正倉院本はこれを「孤霧」に作る。この句は滕王閣故事と欧陽修の批判によってむしろ名句となり、「孤霧」を駆逐し「孤鶩」の語を固定させてしまった可能性がある。第二は、「滕王閣序」と「滕王閣歌」の関係である。従来両作品は同時に作られたとされていた。序に記されている作詩条件の部分、「一言均賦、四韻俱成」を正倉院本は「八韻」とする。詩は八句で中国諸本の記述が正しいように思われるが、「滕王閣歌」は途中で換韻し「滕王閣序」の押韻条件と一致しない。正倉院本が当初の文字であったかは分からないが、中国諸本の「四韻」は、序と詩が同時に作られたとする物語の影響が考えられるのである。第三は、「勃三尺微命」の「三尺」である。これまで「三尺」の解釈は一致しなかった。ところが正倉院本はこの文字を「五尺」に作る。本章では王勃の他の作品や典拠から考えて、「五尺」が作

品の本来の文字であることを考証した。当初は「五尺」に作り、勉強を始めたばかりの若者と自分を卑下する表現であったのに、中国諸本が滕王閣故事における少年王勃の姿が反映された「三尺」に書き換えられたために、後世、下級役人あるいは法律書を指すなどと解釈が混乱することになったと考えられるのである。

「日本に伝わる『王勃集』残巻」は、日本に残る王勃集が、いつ頃筆写されたテキストであるかについて考察した。上野本・東博本について内藤湖南は、華字の缺筆があるが則天文字が用いられていないので、則天文字を用いる正倉院本より早い時期の筆写とした。蔵中進はこれに反対し、同じ時期のテキストを筆写したとする。本章は華字の缺筆状況を石刻資料に求め、上野本東博本は華字缺筆のみが行われていた時期、即ち垂拱二年（六八六）から永昌（六八九）までに筆写されたテキストで、兄弟によって編纂された最初の『王勃集』の一部とした。一方正倉院本はその成立時期は不明だが、則天文字使用期間中に王勃の詩序のみを集めた、『王勃集』とは別のテキストを筆写したものと論じた。上野本等は『王勃集』編纂から五年以内の文集、正倉院本は、最高級の紙に最新流行の文学者の最新のジャンルを、最新の字体で書いて鑑賞することを目的とした鈔本とした。このことは王勃の作品、特に詩序が、中国で如何に流行していたかを示すものでもある。

「『王勃集』の編纂時期について」は、東博本に載る王承烈の王勃に対する祭文の製作時期を手がかりに、『王勃集』が編纂された時間を限定しようとする。前章で『王勃集』編纂の下限となる時期を示したが、本章はその上限を定めようとする。

「族翁承烈致祭文」は王勃の霊を祭る王承烈の文章である。その冒頭に一部しか残っていない文字を羅振玉や陳尚君は「文明」とし、湖南は別の文字の書き誤りとする。仮に「文明」という年号であるとする、王勃の死から約八年という長い時間を経て祭文が作られたことになる。東博本には王承烈の手紙が載るが、その第三信には、王勳の手紙を持ってきた使者から、王勃が南方の地に仮埋葬されたままであることを教えられたと解される文言があった。彼はこのことに衝撃を受け、祭文を作ったのであった。そして履歴から考えれば、文明元年に彼は揚州で祭文を書くことが可能であった。以上のことからこの祭文冒頭の文字は「文明」であり、本章は『王勃集』が文明元年八月以降に編纂されたと結論する。この時期については傅璇琮らに既に主張があるが、王勃の没後時間を経過した「文明元年」に王承烈が祭文を作った理由を、彼の手紙及び履歴から補強した。

「王勃南行考」は、王勃集残巻中の作品を主要な資料として、王勃が父の交趾赴任に同行した可能性があることを主張する。王勃の生涯最後の旅となる交趾行は、既に着任していた父のもとに向ったとする王勃独行説が有力である。独行説は『新・旧唐書』の記述に基づく。しかし『王勃集』巻二十九（東博本）から切り取られた神田本「過淮陰祭漢高祖廟祭文」は、父がその場にいたように解することが可能である。更

に『王勃集』巻三十（東博本）に載る王承烈の手紙にも父子同行の可能性を示す文言があった。王承烈の手紙は三通が一つにまとめられたものであるが、内藤湖南は王勃宛の二通と王勳宛の一通とし、陳尚君は第一信を王勃宛、二信・三信を王勳宛とする。本論文では、第一信は旅の途中にある王勃と父王福峙、特に王福峙に会いたいという招待状のような手紙と解する。第二信はその招待に応えることができなかったことを詫げる王勃の手紙に対する王承烈の返信と考えた。以上のことから王勃の南行は、父の任地に一人で向かった旅ではなく、父と同行した旅であったと結論し、『新・旧唐書』が単独行としたのは、王勃と父の交趾へ向かう出発地が異なっていたことを原因とするという推測を述べた。

第Ⅱ部では日本に伝わる『王勃集』のテキストとしての意義を論じたが、第Ⅲ部「日本伝存『王勃集』の“発見”」は、これら残巻の発見がもつ意義について紹介した。「伝橘逸勢筆「詩序切」と上野本『王勃集』の関係」は、MOA美術館が所蔵する国宝『翰墨城』所収「伝橘逸勢筆」という古筆切が、上野本『王勃集』の切断された一部であることを論証した。三行四十六文字のこの古筆切は、内容及び、紙高、字体、そして透けて見える紙背の文字から、『王勃集』巻二十八から切り取られた「陸□□墓誌」の銘文の一部であることを明らかにした。本古筆切が橘逸勢の筆とされたことは、江戸時代初期には、『王勃集』が王勃の文集であるという伝承を失っていたことを暗示する。正倉院蔵『王勃詩序』は、楊守敬が『日本訪書志』で紹介したことによって日中の学界に知られることになった。但し楊守敬は原本を見たのではなく、博物館の石版影印本を見たのであった。その後印刷局からも石版で影印され、羅振玉はそれを用いて『王子安集佚文』を出版した。日本は原本を影印することによって、中国はそれを翻字することによって世に発表したのである。

「日・中における正倉院蔵「王勃詩序」の“発見”」は、このように王勃詩序は日本と中国の学術交流を示すものであるが、また一方で日中それぞれの鈔本に対する考え方の違いが示されているということを指摘した。

「日本伝存『王勃集』残巻景印覚書」は、先の論考が正倉院本に対する考察であったのに対し、上野本・東博本の影印を含め、王勃の文集の発見と、その影印の背景や目的について整理した。博物館・印刷局による正倉院本の影印は、その書跡の美しさの鑑賞、即ち一義的には書道文化界に対する提供を意図したと思われる。次に発見された『王勃集』巻二十八は、江戸時代に考証学的な興味から一部が模刻されていたが、上野家所有後の影印は、書誌学的関心にもとづく。最後に発見された富岡本は、元の所蔵者である赤星家の茶道具類売り払いのオークションにかけられたことから明らかのように、その発見には、大正に入って急速に勃興してきた茶道文化界の存在があった。このような幾つかの文化界の交差するところに『王勃集』の発見がある。そしてこれら『王勃集』の発見後、影印を主導したのが内藤湖南であった。湖南の多面

的な学術的貢献の中に書誌学研究も含まれていることを本論はあらためて強調した。更に、吉田家や楊守敬の模刻から石版、そしてコロタイプと、より精密な印刷が可能な新技術の利用が、その発見と研究に貢献したことを指摘した。『王勃集』残巻の発見、そして研究の進展には、日本の近代における文物の流動と新旧文化界の勃興、印刷技術の進歩により精巧な複製が可能になったことも一つの要素として考えるべきなのである。

以上のように、本論は、王勃及び彼が生きた初唐という時期の文学の特色や、その文集の近代における発見が、当時の文化史・学術史を象徴するものであることなどを述べた。更に日本に伝わる王勃残巻のテキストとしての性質と、その文学的意義も紹介した。

(論文審査の結果の要旨)

王勃(650～676)は、楊炯・盧照鄰・駱賓王の三人とあわせて、初唐を代表する文人「四傑」のひとりとされる人物であり、短い生涯の間に魅力ある詩文を数多く残して同時代の人々に広く読まれた。その流行の影響は日本にも及び、平城宮出土木簡に記された手習いの文字からも王勃の句が見出されている。ただ、唐代に編まれた原『王勃集』は宋代に散逸し、現在まで伝わる王勃の作品集は『文苑英華』などの詞華集を利用して明代に再編集されたものである。このような版本の伝存状況を大きく変えたのが、明治期日本における古写本『王勃集』『王勃詩序』の発見であった。これら古写本は、王勃の没後間もない時期に唐で編まれた原『王勃集』に由来する本文の面目を伝えたと推定され、現行本で失われた逸文数十篇のみならず、本文校訂に寄与する異文多数も含むことが内藤湖南・羅振玉によりの確に指摘されている。ただ、これら古写本の発見以来、日本で公刊された『王勃集』に関する研究は意外に少なく、まとまった成果としては長田夏樹氏らの『王勃詩序』訳注を数えるに過ぎない。

論者は、多年にわたり王勃作品の写本・断簡の校訂・調査に取り組み、その報告を国内外で精力的に発表するとともに、難度の高い原典を緻密に読み解くべく努力を重ねてきた。本論は、こうした着実な基礎作業を踏まえた上で、王勃に代表される初唐の文学者たちが、先行する南北朝時代の文学をどのように変革し、続く盛唐の文学への道を切り開いたのかを日本所伝古写本に含まれる作品群に重点を置きつつ、文学表現の細部まで熟視し、明らかにしようとした研究である。

第Ⅰ部「王勃の文学とその周辺」は、旧北朝地域の知識人階層の出身であった王勃が、文壇の主流であった旧南朝地域の文学の作風に対して持った違和感、おのれが野に在る不遇感こそが、従来の穏やかなサロン文学とは異質の、唐代文学の新たな可能性を切り拓いたことを説く。ここで論者が注目するのは、王勃が一生を通じて作りつけ、作品数が特に多い文学ジャンル「序」の各篇である。論者は、王勃の生涯を最初期・蜀滞在期・虢州参軍期・交趾への途上という四期に分け、各時期一篇ずつの「序」の実作を丁寧に読み解いて訳注を付し、各時期で「序」の作風が変化している事実につき論じる。さらに一歩進んで、南北朝までは必ずしも一般的でなかった集団による文学創作の場での「序」が、初唐以降になると量的に顕著に増加するだけでなく、中下級官僚の宴席の場において作られるものとなり、かれらの集団としての私的な感情を盛り込むジャンルへと変容を遂げていったという注目すべき見解を提示した。中唐以降の「序」は、公的な立場での自己の存在の意味を主張する文学へと変わっていくという見通しまで示されている。従来、唐代における文学の転換が取り上げられる際、ほとんどの研究者は詩風の変化のみに着目し、文の作風をあまり問題にしていない。本論の指摘は、今後の唐代文学研究に、新たな視点の導入を迫る可能性を含む。ついで第Ⅰ部の結尾では、初唐四傑のうち王勃・楊炯・盧照鄰の三人が、政治的不遇の中にあっても精神の価値を主張しようとし、自らが理想とする価値の投影として作品中で陶淵明像を描いたことを述べ、この価値観こそ「序」の執筆態度にも通

底するものであることを論じた。

第Ⅱ部「日本伝存『王勃集』の意義」は、日本に伝わる古写本『王勃詩序』『王勃集』を取り上げ、その本文としての価値、中に含まれる逸文の意義、現在残る作品から推定される原『王勃集』の編纂時期などを中心に論じる。論をすすめるにあたって、中国伝来の各版本と日本古写本との文字の異同を列举し、後者こそが王勃の作品の原形態により近いことを具体的に示した部分は、文献研究として説得力に富む。さらに、『王勃集』巻二十八・巻二十九・巻三十が内藤湖南の意見どおりに唐写本にほかならないことを再確認した上で、正倉院蔵『王勃詩序』が698～704年書写の唐写本を日本伝来から間もない時期に転写した写本であることを唐代墓誌の用字を精細に調査して検証し、日本がいかに同時代中国の文学的流行に敏感であったかを物語る資料であると位置付けたことは、本写本の評価に関わる重要な成果である。

第Ⅲ部「日本伝存『王勃集』の“発見”」は、日本伝来古写本がどのように明治日本で発見され、その成果を中国学界がいかに受容吸収したかを中心に論じる。まず「伝橘逸勢筆「詩序切」と上野本『王勃集』の関係」は、MOA美術館所蔵『翰墨城』のうち一葉が『王勃集』巻二十八の断簡であることを発見し、王勃の作品研究に新たな資料を加えた。「日・中における正倉院蔵「王勃詩序」の“発見”」「日本伝存『王勃集』残巻景印覚書」は、これら古写本の発見後、内藤湖南の貢献がいかに質的に高く重要なものであったかを詳細に論じた章である。

「終章」は、日本伝存『王勃集』の意義を簡潔にまとめるとともに、そこに収められた諸作品の内容に拠り、初唐の文人相互の影響と交流関係が従来考えられていた以上に密度が濃いもので、それが新しい文学を生む土壌となった可能性を示唆する。

本論は、従来水準を大きく超えた規模の研究であり、今後の『王勃集』研究において必ず参照されるべき成果だと評価できる。ただ、論者が日本古写本に含まれている「序」「墓誌」の分析に力点を置いた結果、王勃の文学の革新性を代表するジャンル「詩」についての論述がほとんどなされなかったことは惜しまれる。この点は論者自身も気づいており、「終章」では王勃「春思賦」が唐代文学史上で重要な位置にあることを簡潔に述べている。一部、論述に整理が望まれる箇所もあるが、全体からみれば瑕瑾に過ぎない。将来、論者により王勃の作品の全体像が論じられ、初唐文学の独自性が一層明らかにされることに期待したい。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。平成28年9月21日、調査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当分の間、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。